

研究分野のキーワード：織組織, 先染, 北欧, テキスタイルデザイン, ワークショップ

#### 研究紹介

北欧の手織を研究しています。北欧の手工芸の特徴は、素材と形にあります。実用品であれば、用と美を兼ね備えたシンプルなものが求められます。シンプルとモダンが北欧のデザインの本質だと考えています。日本でも利休形を比較すれば、その共通性を発見できるでしょう。

染織に関しては、日本と北欧ではその風土、民族性、歴史からそれなりの違いがあります。雪国である北欧では、防寒が第一の目的でした。羊毛が生活全般に深く関係していました。次に重要なのは麻で、ウールと並び利用されてきました。日本と同様、木綿は比較的遅れてやって来ました。日本は、高温多湿なモンスーン地帯にあります。ウールより絹が広く使用されました。素材に関してはこの違いが一番大きいと思います。それではウールと絹の違い以外に何かあるでしょうか。まず思いつくのは、日本の布は着物に重心があります。日本では「衣・食・住」と来ますが、北欧ではおそらく「住・食・衣」ではないでしょうか。私たちの家の中を見渡しても布の量はそれほどでもなく、以前であれば、寝具以外では座布団ぐらいでした。布の代わりに畳、漆塗の品々、障子などが機能していました。北欧ではその代わりに敷物、テーブルクロス、カーテンが発達しました。

北欧出身の私の研究ですが、「間仕切り」です。室内における数少ない日本の布ですが、興味深いことが数々あります。日本文化において「空間」の考え方に西洋とは大きな違いがあるようです。間仕切りはこの点からも立派な布だと思います。さらに興味深いのは「染」の技術です。日本の「型染」は世界で高く評価されています。幸いなことにそれを可能にする背景がありました。それは和紙、柿渋、豊かな植物、筆などですが、決め手になったのは「水」でした。日本の生活と文化には、豊かな水が染織に限らず重要な役割をこなしてきました。

間仕切りは室内だけではなくありません。格式ある商家の店先にあれば風情あるサインになります。また日本の「家紋」も広く世界に知られています。屋号や家紋が加わるともはや単なる一枚の布を超えた世界が誕生します。

私は二つの国：日本とフィンランドの文化を学ぶことが出来ました。北欧の織文化を日本に伝えることも大事な研究分野です。文化は色々な方法で伝わりますが、出版も有力な方法です。海外の文献は「ことば」の壁があります。この点を考え、北欧フィンランドの織物の教科書を日本語と英語で出版しました。

一枚の布を通して、生活文化や精神文化をより深く知ることが出来ます。